

近藤芳美賞

（新作十五首）

定める、定まる

太田 宣子

（岐阜 45歳）

「定まる」ということは、私の理想の生き方のひとつです。しかし、なかなかそうはいかず、日々の慌ただしさにからけて、意識することもままならないときも多いのです。しかし、短歌に出逢って、短歌の五七五七の定型に出逢って、大きく励されました。定型の懐は大きく深く、情けなくゆらいでばかり、歪みばかりのおのれや生き方をおさめてくれます。ついついこの安定感に甘え過ぎてもしまうことを戒めねばならないのですが、ウイニコットのホールディングの理論のように定型におのれの心を育んでいたいだと感謝しています。また近藤芳美賞は創設されてより常に応募し続けており、本賞をとても有り難く思っています。

「どこにもゆけないやさしさ」と出会いながら、対象への距離をはじめから「定める」姿勢を取ってしまう。自己意識が強すぎるのか、愛することによって崩壊する心が怖いのか。相手の愛を試みる言葉や、裏の裏はまた裏という懷疑もみせて屈折の深い恋。結局自己葛藤に終わつた結語の一首は、恋以前に人間としての芯をもとうという落着きをみせる。しかしイメージを喚起する比喩も豊富だし、十五首の展開も巧みで、力ある作者だと思う。

（馬場あき子）



才気ある人の連作です。「くちづけをくちづけでかへすひととゐて」などと始まりますから、その「ひと」との愛の歌かと思つてしまいますが、「二首目に明らかなように「われ」とはなにかを問い合わせながら一首一首が作られています。「まだ遠いはずとゆるゆるおもふ死の」の歌や、「じつと見てみるとなんでも好きになる」の歌のように、孤独感がよく出でている歌もあり、十五首の出来栄えが揃つていて読みごたえのある一連でした。

（岡井 隆）

選にあたつて

くちづけをくちづけでかへすひととゐてどこにもゆけないやさしさばかり
みづからに小石を投げてその波の届きしまでをわれと定める
きみを試すことばのばうばう繁る喉 波立ちてまたしづもるからだ
泣くことも泣かないことも上手くなる 虹を隠せぬ胸のからつぽ
空そして空をゆく鳥 それぞれがそれぞれのたましひの容れ物
まだ遠いはずとゆるゆるおもふ死のトマトジュースのぬるい後味
ゆるされる こころのコップをさかさまにしてみづをぜんぶ捨てるみたいに
裏の裏はまた裏だつたくちびるの形どほりに口紅を塗る
匙ひとつ西日を長く曳いて落ちのちの無音を冷えてゆく床
じつと見てゐるとなんでも好きになる あなたの指が苺を洗ふ
崩しても崩しても海アイロンのいらないシャツの背なは夕凧
岸を噛む波を見てゐる感情の防波堤かもしけないここは
ちやうどよく欠けたる月とわれとゐてやがてすべてが懐かしからむ
わたくしはわたくしの影に付いてゆく ペディキュアのけふも剥げた指先
吐く息のことんと白い 林檎には林檎の芯のあつて定まる

選者賞 空色

三田村正彦（京都）

いさかひの前触れだらう お互ひにブラフ並べて出方を待つた
スクランムを組む雲の群れ天窓に雨の形が広がつてゆく

公園の蛇口に残る一粒の水に寄り添ふ風は空色

静かなる風の力を感じて 列車の窓に貼り付く夕日

夕焼けは陳腐な言葉感動の種が少なくなつてきました

渋滞の車が闇を取り巻いたライトに山を占拠したのだ

月光は水びたしなり路地裏をすべる間は身じろぎもせず

靴音の右折せりけり地下街にだあれもゐないコンビニがある

積み上げた本が下部から崩れゆく午前零時の空が見えない
ミサイルの映る瞳のその奥に溶け出してゐる常識つて奴

八月の電信柱じりじりとリードしてゐる球児の肺

古井戸に落ちたる石の音聞こゆ子供の世界だけが透明

なだらかな坂道だから生きて来た街に沈んだ人々の声

黒ずみし電球ひとつ テーブルを日常が過ぐ肩を落として

ビル群を照らす点滅信号よ死者の裸体が動き始める

選評

今回の応募作品は、昨年にも増して力作が目立ちました。中には、入賞などには直接関係ないような態度で、自分のやり方で生活を述べたり回想詠を提出している高齢（と思われる）の作者もおられて、わたしは感動しながら選考にあたりました。

選者賞の三田村正彦さんは、昨年に続いてのことで作者名が、あとでわかつて驚きました。歌の巧い人ですが、「黒ずみし電球ひとつ テーブルを日常が過ぐ肩を落として」など秀作でしょう。更に完成度が高まれば評価は高まると思います。

奨励賞の松本実穂さんの一連は、夏目漱石関連の場所を題材にしていて、読みごたえのある一連でした。「北へ北へ嵐ゆかせて：」のイメージの深さ。「うすつぺらに畳まれてゆく傘のやうに：」のよくな自分へのかえり方など、完成度の高い歌が並んでいます。この人の次作を読みたい気分になります。

もう一人の奨励賞の吉田光子さんの「アプリコットのラベル」は、ある明るさがあつて読者をよろこばせます。例えば「ガブリエルといふ名の薔薇」「私です夕焼けをジャムの」「風の音かそれとも」などという歌がその代表のように、愉しく読みました。

奨励賞 しんと響く 松本 実穂（フランス）

夏目坂上りきたれば降る雨の墓石鈍く照りそむる夜

板敷に大黒さんを呼ぶ鉢のしんと響きてほほづき灯る

寺の下駄からころ雨を三叉路に迷へるひとを迎へにゆかん

北へ北へ嵐ゆかせて大公孫樹は漆黒の空に深く抱き合ふ

沈みたる湖より還り来しやうに老い猫深く寝息を立てる

漫ろ言、寝言、睦言 言の葉はさらりさらりと落ちてさびしむ

うすつぺらに置まれてゆく傘のやうに小さく終はる生かもしけず

暗渠なる川に還つてゆくために記憶しておく人の振動

ふかぶかと『こころ』を閉ぢぬみなそを半鐘昏く鳴り沈みをり

眩けば願ひの叶ふ地蔵堂ひとの別れを眩かず過ぐ

止まりる時を手首に巻きて佇つ墓地とは草の生えゆくところ

楠緒子の黒き墓標を読む人とわれの間にふる細き雨

赤き傘のしづく散らせて菊を抱くひと漱石の墓を過ぎゆく

まだ持たぬエンディングノートに書く言葉ひとつ思ひて道を戻りぬ

まがなしくひとはひとりで立つものを石に咲き継ぐ菊の切り花

奨励賞 アプリコットのラベル 吉田 光子（愛知）

物分り良い子でなんてゐられない空の羊はときをり逸る

洗ひたる木綿のシャツは陽に温み疲るるたましひ包んでくれる

耳を立てやや俯きて木菟の像のしづかな思索は続く

ガブリエルといふ名の薔薇の花びらは受胎告知のごとく震へぬ

銀河から零れし蒼さ点しるるローズマリーの真昼の倦怠

回送の表示ぼつちり灯るバス初秋の町のゆふぐれを行く

夕映えに町はほわりと膨らみぬ寂しさほどき家に帰らな

私は夕焼けをジャムの壇に詰めアプリコットのラベル貼りしは

ブランコに月の光はゆるやかに注ぎてとほき記憶を揺らす

風の音かそれとも胸に棲む鳥の鳴きゐる声かきゆいんといふは

ドロップを缶にカラコロ揺らすとき胸に掠れて薄荷のかをり

磨き終へしはづのコップに曇りあり隠しきれない痛みのやうに

忘れねばならぬ記憶を詰め込みて剝がれさうなる封印ひとつ

透きとほるボトルシップのガラスの帆 きよきといふは哀しみに似る

とつぶりと暮れたる空に混沌とせる創世紀の昏き風吹く

篠 弘選

選者賞 アンジエラスの鐘 安藤 純代（千葉）

今年も芳美賞の応募作が多かったことをよろこびたい。この十五首という括りは、いわば連作の基底をなすものであり、一つの主題が詠み込まれることを希みたい。

時を超えた朝のしじまに鳴りひびく祈りのごときアンジエラスの鐘

五十トンの鐘楼落ちてきしあたり吾子とならびてオラシヨをゑゑぐ
雲の間に瞳のごとく見えにけむ低きいらかを並める長崎

一瞬の閃光ひらき信徒らに壁、天井のくづれ落ちしか

会堂は森閑として床のうへステンドグラスの五色が流る

Non-Violent Communication 非暴力コムニケーション 血を流しいまも説けるや裸のイエス

飛ばされし帽子のぐとく転がりてそのまま時を止めたる鐘楼

裏返り埋もれしままの円蓋に鉄川与助の木組みがのこる

園児らの声のひびけり下の川 ほそき流れに夏雲うつす

戦犯のA、B、Cの違ひすらあやまちしまま歴史教へき

首筋に暑き日射しを感じつつマッハシステムの円心に佇つ

原子野かシンの荒れ野か炎々と鬼火のつづく ひとつ幻

火ダルマとなりて滅びし文明の古代にありて砂塵が舞へり

月のみが皓々として天主堂ライト・アップは十時に終はる

熱線も瓦礫もいまだこの背に受けしことなく母と呼ばれる

選評

選者賞の安藤純代さんの「アンジエラスの鐘」は、長崎の被爆した浦上天主堂から始まる。芳美賞に相応しいモチーフで、「園児らの声のひびけり下の川 ほそき流れに夏雲うつす」「首筋に暑き日射しを感じつつマッハシステムの円心に佇つ」など、作者の聴覚や皮膚感覚に結びつけたものが佳かつた。回想的な哀感は、むしろ払拭された方がよい。

奨励賞の吉田光子さんの「アプリコットのラベル」は、やや主題性が薄いが、寂寥感や透明感に反応した感受性を認めたい。「透きとほるボトルシップのガラスの帆 きよきといふは哀しみに似る」に着目する。「磨き終へしほのコップに曇りあり隠しきれない痛みのやうに」も、相通ずる魅力がある。

重松美智加さんの「ベランダ」は、ガーデニングの歌ではない。「団子虫の動くは樂しこの星に送りこまれし探査機みたい」「満月の球体浮かび露なり乳腺透けるクレーター・ティコ」など、宇宙感覚を生かした比喩が見出され、忘れられない一連であった。

奨励賞

アブリコットの 吉田 光子（愛知）
ラベル

奨励賞

重松美智加（福岡）

物分り良い子でなんてゐられない空の羊はときをり逸る

はぐ

洗ひたる木綿のシャツは陽に温み疲るるたましひ包んでくれる

耳を立てやや俯きて木菟の像のしづかな思索は続く

ガブリエルといふ名の薔薇の花びらは受胎告知のごとく震へぬ

銀河から零れし蒼さ点しゐるローズマリーの真昼の倦怠

回送の表示ばつちり灯るバス初秋の町のゆふぐれを行く

夕映えに町はほわりと膨らみぬ寂しさほどき家に帰らな

私は夕焼けをジャムの壇に詰めアブリコットのラベル貼りしは

ブランコに月の光はゆるやかに注ぎてとほき記憶を揺らす

風の音かそれとも胸に棲む鳥の鳴きゐる声かきゆいんといふは

ドロップを缶にカラコロ揺らすとき胸に掠れて薄荷のかをり

磨き終へしづのコップに曇りあり隠しきれない痛みのやうに

忘れねばならぬ記憶を詰め込みて剝がれさうなる封印ひとつ

透きとほるボトルシップのガラスの帆 きよきといふは哀しみに似る

とつぶりと暮れたる空に混沌とせる創世紀の昏き風吹く

ベランダの壙にスキップするすずめ人間の子も壙が好きだよ
上靴も小手も枕も筆も干す空どこまでも清々しくて

ジーンズに初めて日にする国のタグmade in Myanmarお日々まに干す

ミニバラの小さき薔は音符のよう咲く音あらば奏でてみたし

分度器の目盛りを刻むこと開く射干は葉を生む起点を持てり

サボテンは育てるよりも育ちゆく育児書の説く氣楽さに似る

姫パインの栽培セットの名護の土かくも鮮やか島人ぬ赤

午後一時「給食ごちそうさまでした」諸声溢るる教室の窓

空襲を悼む集いの子らの歌ふんわりふんわり輪唱聞こゆ
団子虫の動くは楽しこの星に送りこまれし探査機みたい

薔薇の花咲き極まりてその中に線香花火のごとき雄蕊よ

突然の雨に打たるる布団あり四枚並ぶあのベランダは

配管を落ちゆく雨の音長し子に傘を持たせればよかつた

満月の球体浮かび露なり乳腺透けるクレーター・ティコ

ほの光る天の勤務地上空を「きぼう」の一点流れゆきたり

選者賞 眠る水眠らぬ水

田中亜紀子（三重）

選評

なめらかに水一枚を切り開く舟を見送り川は静まる
バナナの実百本ほどを実らせた枝無造作に路上にありて
駆け落ちが続く路傍の野菜店いつも静かなあの子も消えた
賃金に見合う仕事はどこまでか怒り顔した屋台の売り子
現地語で挨拶交わしあ互いがニッポンジンと知る昼下がり
コーヒートとおしゃべり求めやつて来る去年退職した老教授
親不孝のシンボルであるバナナの木空き地があれば植える人たち
子世代の苗が育てば親世代枯れるバナナにまだなれなくて
エメラルド色のバナナの葉が揺れて落ちそうになる透明の玉

全体に年齢の断層が鮮やかで、題材も詠みぶり
も千差があり面白かった。これがまさに現代短歌
の部厚さなのだと思う。かつて経験した戦争とは
何だったかを問いかける歌。またそれによつて生
まれた情況への批判、戦後を一生終わらない心身
の傷を背負つて生きている現実。そして、戦争も
戦後も知らない若い世代の理想に遠い現実から求
める希求や夢や、時代への眼差、精神のさびしさ
を克服しようとする知的な悩みや、詩を求める表
現の工夫まで、心にひびく数々に出会つた。

そうした中で、「眠る水眠らぬ水」に心が止
まつた。これは東南アジアのある国で教師をして
いる作者。日常体験する暮らしの中に異和の魅
力をみつめ、その風土や風俗に親愛の視線を向
けている。素直なしぜんな詠風にふさわしい統
一感があつた。「親不孝のシンボルであるバナ
ナの木空き地があれば植える人たち」に示された示
唆的な一首に代表されるような発見の魅力が期
待される。また、「無糖の紅茶」も中年の愛のか
たちが、実質的で厚みのある典型のようにうたわ
れ、真摯な実態感が伝わり好感をもつた。さらには「星月夜」なども悪くはない。若い失恋の歌だ
が、言葉に実感があり、言葉の力を思わせてくれた。

部屋にお残る香りよジャスミンの期待を背負う教師たるもの
眠る水眠らぬ水の立ち上がり歌い始める南国の夜

奨励賞 無糖の紅茶

岩本 実佳（埼玉）

奨励賞 星月夜

望月万里葉（千葉）

とびきりのタマゴサンドを作らねば目覚ましの鳴る前に目覚めて
お互いを絆創膏で貼るだけの傷の浅さに以上求めず

花ひらりタマゴサンドへ降りゆけばスローモーションの君との時間

常温のコーヒーヒーを飲み「楽しい」の時間の終わる臘月の夜
「会えない」のメール開けど三両の電車は進む傘に居場所を

籠となるシリアルナンバー入力し夏の扉へ歩幅合わせり
一人では濃いレモネード飲み切れずに結ばれてゆくスクリーンの二人

松葉杖の音をみつけた七月の君と重なる誕生日咲く

恋文はもう渡さない三十を過ぎて選んだ無糖の紅茶

八月のかに座のラツキーナンバーの8を頭に迎え待つ朝

青空にパズルを嵌めてゆくよくな夏の会話で坂道のぼる

スクリーンをみている君の横顔の笑い皺みて氷は溶けたり

君はいま帰宅中かな落ちついてからでいいよの新月と待つ

君の名のマナーモードの響く夜のブルーライトが素肌を冷ます

伸びてゆく影とカラスの鳴く声と一本道は君までの道

螢光灯がやけにあかるい陽の下に立てぬわたしとどこか似かよう
星空と共に鳴し合う街の灯のひとつひとつを魄と呼ぶ

除夜の鐘のようにはみ出さぬ電車できみに逢いにゆきます

偶然をよそおいながら咲いている ただゆうがおのような貌をして

脆さばかり浮き彫りになるシクシクと林檎はあかく泣いてクレーター

影踏みをしながら帰る些細でも欠けた部分を満たせるように

クレーターだらけの心だからこそいつも明るい月でいたんだ

縁のある眼鏡にずっと護られてランドルト環の月が欠けない

折れかけの心のかたち 折り鶴はいくつも幾つも重なつてゆく

遺されたひかりを知つているように震わせている線香花火

かなしみは何処まで続く頬の上の星と星とを線でつないだ

恋い恋いて如何にせんかなピリオドを打ちても星で まぶしい

忘却は罪です 緋い挿し色の曼珠沙華が咲く切り裂くように
忘れ去ることが出来ないように春はまた花びらの付箋をつける

入選

※十五首のうち、八首を抄出しました

都道府県別名前五十音順に掲載しております。

飼育箱の四季

武藤 敏子（宮城）

冬越しの蛹羽化終へ飼育箱を洗つて今年のアゲハを待ちをり

弓なりに胴を震はせ柚子の葉にアゲハ産卵す一粒一粒

芋虫は自分が衣を脱ぎし後その黒き皮ひたすらに食む

だうだうめぐりの衣脱ぎたし芋虫が次々脱皮してゆくやうに

ゆるやかに羽に命のゆきわたりアゲハは飛翔の呼吸ととのへる

絞染の手法ならむか陽と陰のシンメトリーのアゲハの模様は

紹の衣の如く真夏の陽に透けて黒き揚羽の魂たゆたふ

飼育箱の中の蛹は飛ぶ夢をみてゐるのだらう冬の陽の中

木立 徹（青森）

北辰の光あまねく照らせよと祈り続けて来たりし土偶
時は枯れ世もすゑとなり神々はたそがれを待つ頬杖をして

モーツアルトのレクイエムを聴くしづかにも深き闇より湧き出づるもの

らふそくの炎が照らすラ・トゥールの深き闇より湧き出づるもの
たよりなき光ふらりと手をのばすわが部屋はまだ冬の砂浜

ふりかかる朝のしづくがひいやりと頬を伝ひて落つる啓蟬

天空に手を振りかざし堂々と花ひらきたりオホヤマザクラ

わがことを離れて両手を合はすとき天の御使ひのやうに降る雨

回想

片野 稲子（福島）

ドクターを伴い比島に人々を救いし祖父との暮らし遙けき

五ヶ月余戦火逃れし密林にラワンの葉など食せしならん

密林に家族を守り自らの癪切り裂きし父を見ませり

カラカラと戸の開く家に住みたいねと皆を励ましき引揚げ者の父は

夕暮れに教室出でて父親が薪背負い来し戦後の分校

バリカン手に数多の児等の髪刈りし分校教師の父の奉仕日

授業中の校舎の前を足早に配給米を背負い帰りき

兄妹六人父に学びし廃校の藁布団干したる石に座りぬ

根本由紀子（宮城）

語尾が広がる

根本由紀子（宮城）

簡潔な理路をもつらむ春の朝白鳥とびたつ水脈かがやかせ

数式を順よく解けるノート借り見えぬ心も探りるたりき

「ツーアウト」マスクの中より語尾長く甲高き声空に広がる

幾枚ものガラス戸越して映りくる柑橘色の朝陽がとどく

北側の戸を開けて竹林の光の束を仏間に通す

心経の一行写し終へるころ窓からの風に墨の乾けり

大根の間引き菜摘める親指と人差し指のやはらかきかな

隣家との木戸口に咲くシウカイダウ雨にうたれて紅にじむ

汗だくの顔

黒羽 千尋（茨城）

遠き祖の手の温もりが今もなほ残るがごとき畑の土器片

この国の山河にあこがれ来る鳥に病原ウイルス宿るは悲し

生き方の手本を吾に見せぬまま逝きたる父の若き写し絵

田畑を一人で守りとほしたる母の鍼音 汗だくの顔

少年の心にさつと染みこみて今も咲きゐる山路の桔梗

間伐し下草刈りし里山に楚々と咲きゐし春蘭の花

自制することなど知らず伸び立ちてメタセコイアは孤愁を託つ
ラケットに打たれ続けしゴム球がコートの隅に遺棄され濡るる

蒼き底

寺山 昭彦（茨 城）

ほがらかに父は出かけし玄関で靴ひも重たく結べずにより

別々の問題集を抱えたる背中が並ぶ通勤電車

ぬんめりと焦点のない風景画総務部人事課Sさんのこと
パソコンの壁紙青い空に替え正解のない問題に向かう

地縛りの繋がりたる根を引き抜けど消したき過去はそのままにあり
ため息が小さな炎となるならば今日の記憶を燃やしつくさん

何処へと帰りたいのか故郷か子宮の中か悩める君は
それぞれの心に蒼き海がある友の作りし杯の底にも

同行二人

青木 一夫（栃 木）

在りし日の立松和平に誘われ四国遍路の旅が始まる
幾代の遍路が踏みし道ならむこの畦道を我も踏み行く

行き倒れ旅の終わりは無縁墓我も五輪の杖を突き行く
息切らす難所の山の道すがら下がる短冊「同行二人」

酒酌むも一夜一会の遍路宿手首の傷に触れず別れる
ひたすらに絆を上げれば携えし遺骨がいつしかことこと和す

果てしない海に補陀落疑わず春の潮と足を遊ばす
ザック負い峠を下る花遍路桃源郷に見とれ佇む

止まりまた走る

曾川 文昭（栃 木）

国道を北へ車を走らせて見れば日本は傷を抱く国

わが車を追ひ越しゆくはハヤブサとゼファーもうすぐ秋風が来る
おそなつの陽にさらさる午後の街戦争はどこに潜みてをらむ
半島の反日デモも日本の反韓デモも出でてはゆかず
韓国より出張の若き皆さんと黙禱したり三月十一日
午前三時エンジン音を鳴らしつつバイクは走り止まりまた走る
試作品の精度の数値にらみつつ何回目なる緊急会議
構造体その美しき名を秘めて開発ののちは空を飛ぶべし

現代鳥獣戯画

岡田 美幸（埼 玉）

にんげんの仮装をしてる命です家に帰つて何か食べたい
エアコンの吐息に一番愛されて部屋の数だけ眠り姫たち

静穏の休憩室に午睡する照明助手を西日が照らす

どなたでも水族館にいる時は水族となることができます
ロボットのレストラン勤めのエンジニア一応ロボにも「お疲れ様です」

ぼくうさぎ さみしくないよカラフルな鳥獣戯画の中でダンスだ
眠れない人の数だけ人工の美少女たちが生まれるアニメ

理科室で共同実験しませんか思い出全て触媒となれ

白いスニーカー

イシカワユウカ（千 葉）

踵には画鋲の跡が癒えぬまま踏みしめる床空の靴箱

あてもなく生きててごめんと呟いた教室の隅にあたしはひとり

脳内が「生まれ変わつたら」で溢れ出す感情なんてなくていいのに
生きてゆくことはいつでも死ぬための準備だと知る日曜の夜

目を閉じてまなうらにうつる幾何学模様こめかみ蹴られて意識失う
止まぬ雨などないなんて戯言を出口がないのはほんとのことよ

震える手握ってくれる人もなくうずくまつて泣くフェンスの外で
花びらが血しぶきのよう舞う春に整列している白いスニーカー

甘き完成

古城いつも（千葉）

クラウドに積載されゆく作品が桜紅葉と色まといゆく
幸水の甘き完成確かめにキッチンに立つ真夜の目覚めは

キャラバンは砂漠の隊商わたくしも前に後ろに一家連ねて
七年を疑うことなく勤め上げ半分は魚のわたしの望郷

パソコンのオペレーションを常としてどうして上がる豆の木の上
キヤツチボールする踝を見つめつつ空が引っ張る緊張の美し
段ボール蹴飛ばすことも業務上ごり押しをする我の正当
暗渠とう土木用語にそぐわずに木立涼しき等々力渓谷

タイヤキノユメ

宮古 梨絵（千葉）

軒下のつがいのハトに嫉妬する誰か私に傘をください
お一人様楽しめるほど強くないマスクをつけて人に紛れる
タイヤキが目にした海はただの夢ハローワークの椅子で目覚める
昨日まる明日は生きてまるになる四十年目をまるにする今日

ファイクション

蝦原加奈子（東京）

花は咲く

森田 満子（千葉）

草は萌え水路に水は満ちみちて人は田起こす頃となりたり
介護終へ軒出づる時沈丁花吾送るごと香りくるなり
採りのこしそのままの菜に春来れば一坪ほどの菜の花畑
雜草と言はれ悲しきひめぢをん咲いては刈られ咲いては刈られ
水槽を静かに泳ぐ白めだか心病む子はもはや中年

花とピアノ

飯坂友紀子（東京）

うずくまり眠るからだを夜明けまで運んだ舟が静かに止まる
思い出の中の街並み上書きを避けて今年も降りぬ駅あり
触れぬまま川を挟んで向かい合う桜の花びら混じりて流る
丁寧にほどいても一度結ばれたりボンは癖を持つて波うつ
指先に水面の触れた感触があり鍵盤は沈んで戻る
曲間を埋める無音に目を閉じるあれは何處かに降る雨のおと
夕暮れに一人になれば何処までも続く並木に影が寄り添う
目を閉じる花の香りがする闇に月とピアノははらはらと散る

一本で会う人変わる朝のバスめぐりめぐるよ知らない時間

スタジオで微笑む写真をまた見つめゆかりの糸を宙に手探る
新聞のニュースメールが鳴らして別れ以降は朝の着信
京都より君がくれたる手ぬぐいの店を見つけて記憶上書く
絨毯にきらりと落ちた一粒は何処からか来て忘れられたか
距離越えて移動したぶん想い出に今日はピリオド打てる気がする
ありのままそれぞれ時間を生きていく二人を繋ぐ友いればいいのに
幸せは見えにくいとは言うけれどベンチでラテ飲む独りの幸せ
明日からは思い出さない過ぎた恋 作者不詳のファイクションとなる

海のない街

黒乃 韶子（東京）

沖縄の海は二人を揺らしてゐるミントゼリーのような煌めき

留守番の子供たちからメール無くそれぞれの旅をみんなが刻む

永遠に一緒にいられないのかなポークおにぎりゆつくりと食む

この街の孤独の色も切り取つて自然のままにシャツターレを押す

聴きなれぬ言葉の不思議を浴びてゐる鍾乳洞は静かに育つ

カーナビに映らぬ橋を渡りゆく夫婦の未来は水に揺らめく

海のない街に育つた私には深海魚たちは未知なる鼓動

結婚の約束の中を泳いでる私たちまだ手を離さずに

海の見える町—パラレル・ワールド— 田島 千代（東京）

空と海 山とそらとの境界線いつもおぼろなふるさとの青

病得て瀬戸内航路をはろばろとこの地に着きし祖父母思うも

砂に描くト音記号は風にちり終止線のみ残るあしもと

この町にもうひとりのわれ住むならん 炎暑の道にすれちがいたり

友集い地酒地魚の宴ひらくこの町捨てし余所者迎え

海に降る雪のはかなさ暮れてゆく仏蘭西窓に映るわたくし

遠き日の短き抱擁思うたび「悲愴」第二樂章うかぶ

そんな人生もあつたかもしれず 右手に海を見る帰り道

人間の鎖つなぎし人びと 中澤 明子（東京）

一九八九年両手広げて「人間の鎖」つなぎし六百キロを

灯灯とトロリーバスが迫り来るバルトの国の朝八時半

冬の陽は仄めきもせず人びとが影絵のようにバスに乗り込む

真昼間のイルミネーションほっこりと橋のアーチに惑星こぼす

リトニア旧日本領事館み仏のこころあふるる杉原千畝

ユダヤ人にビザの発給、その部屋の古き写真が時を語り来
雪ぐものヴィリニユスの地に千畝の碑 若きさくらが両手を伸ばす
ロシアンもエストニアも入り交じりたゆたう船上のクリスマス

想春のソネット

波多野浩子（東京）

思春期はいつだつて泥濘ぬかるんでゐた爪先立ちの月星シユーズ

制服の臙脂えんじのスカーフ戦そよぎつつ心の線維はもつれ始めた

ルサンチマン持たざるとき破顔なり「花」を唱ひし中学生われら

百葉箱に充満したる「熱情」を解き放ちたし紺碧の空

夕まぐれクラリネットは耽美なれ堅きリードを唇に押しあて

横抱きの楽譜が不意に散らばつて告白以前の愛つんのめる

青春は完結しない「未完成交響曲」の清しき展開部

ぱつぱつと今更わかる事があるヒエログリフを読み解くやうに

書棚に眠る

森 祐希子（東京）

明治期の資料復刻版もみな開架書棚に明るく並ぶ

書架の前を端から真中へ動かして登ればきゅうと踏み台が鳴る

日本に輸入されたる映画リスト編みたる人らの名は記されず

人が物が動きたるぞと驚きし時代きらきら鼓動を早め

シェークスピア全集ぜんぶで四十巻 奥付ごとの逍遙の印

第一回配本のハムレットにダストラッパー破れてもなお巻かれていたり
あの書庫のあの棚の上『キネ旬』の別冊が吾をしゆくしゆくと呼ぶ
一つまた一つ 坪内逍遙の小羊ゆき暮れ書棚に眠る

時ゆるやかに

森田小夜子（東京）

要るような要らないような古道具の市たつ炎暑のビルの谷間に
古道具のひとつひとつが過去語る声なき声に耳かたむける

しゅんしゅんとたぎりし記憶の小さき闇うちに秘めいる南部鉄瓶

過ぎてゆく時に身ゆだね飴色の大きこけしが肩を寄せあう

アンティークドールの青き物憂げな瞳がひたとみつめかえせり

子どもらを乗せしはるかな思い出をよびささんと木馬ゆらしぬ

優雅なる小鳥の籠に封じられ歌いしものまぼろしを追う

誰が首を飾りしものかネットレスじやり重なり彩をこぼせり

なつかしき聲

涌井ひろみ（東京）

黄葉のコブシあかるく街照らし君の横顔澄みゆく不安

日曜日「今日は何だか幸せ」と君がつぶやくありがたき時

子を思ふ天狗のやうに街駆ける痛みこらへる夫の許へと

「ガンのことみんな夢ならいいのにね」明るく笑ふ入院前夜

下腹部の違和感消えぬ年明けにモルヒネフルッショ増えゆく怖さ

望の月痛み消えさり穩やかに笑む君坐すあかときの空

沢山のこゑ聴きし耳骨となりこぼれゆく風てのひらにのる

寝る前に青菜をゆがく湯気の中「大丈夫かい」となつかしき聲

一人のひとり

渡辺 靖（東京）

透析にでかけたる妻を思ひつつ心とこころ入れ替へてみる

通院の君につき添ふこの今のこの世のときを幸と思はむ

ひとまかせできざる妻の介護ゆゑ一日の長生きわれにたまはれ

難聴の君にしあれば食卓に会話うしなふ二人のひとり

妻の身にぬるきシャワーを浴びせつつ恥ぢらふさまなき乳房さびしむ

カンガルーの母

エヅレレイコ（神奈川）

夏休み端から端まで娘に暮れる今月無休カンガルーの母

口ごたえばかりが活発辞書引けば反抗期イコール成長期とある

雷と雨騒ぐ夜、窓開けて中二は叫ぶ「あーいい気持ち」

無責任いつになつたら無が取れる「ママつてうざい」とメールが届く

ケータイは職員室で拘留中私の迎えをじつと待つてて

十六歳乳房はまつすぐ上を向く熱い砂漠の駱駝の様に

いとし娘は十六歳を生きている恋する心をポケットに入れ

寝顔天真

奥 尚代（神奈川）

入眠剤飲みて眠れぬ子の苦痛知れどすべなくまた月たちぬ

われと子と赤子と三人秋日さす心療内科に待つこの現実

二駅を乗るは遠しと柱背に娘つぶやく晴天なるに

夕暮れて灯りともさぬ家うちに娘はうすき体を横たふ

両手あげ赤子は眠るゆりかごに寝顔天真あたりをはらふ

声たてて笑ふ赤子を振りかへり娘は笑みつひさかたぶりに

回復のきざしならんか従順にゐたる娘が反論をする

静けさが寂しさにならんならぬやう水音たてて湯あみしてをり

夜の九時、妻の血糖値はかり終へ己の時間のやうやく戻る
たはむれに妻の額に口づけし無表情なる反応わびし
老いふかき君の寝顔に両の手をあてて温もりわれは確かむ

いつもの街並み

小林 典雄（長野）

一斉に人が行きかう交差点規則正しく持ち場へ向かう
通勤の寒さの底を過ぎる頃ハイヒールの音かるやかに響く
梅雨晴れの爽やかな風吹き抜けていつもの路に紫陽花揺らす

日向にも日影にも咲く曼珠沙華いつもの路の一時の赤
街並みは変わらぬようでまた一つ壊されていく善光寺街道

寂れたる駅前通りの商店街閉ざされたままのシャッターの軋み
気が付けば通い慣れたる改札を追い越されゆくもうすぐ定年
何気なく行き交う人を眺めおり長き勤めの終えたる窓辺

光を踏む

有村 桔梗（新潟）

ぬばたまの百デニールを脱ぎ捨てる 一日分の灑のごときを
冬、冬、春、冬、春、春、春としづかに変はりゆく勢力図
もつとも軽きワンピースを選びたり 健康診断ひとひのために
九時以降飲食不可といはれればいはれるほどに口が乾きぬ

するするとわたくしの血を呑み込んで注射器といふうつははやさし
ゐるはずの部屋にあなたがあなない春

二度会つただけといへども二度会へば忘れぬこゑのあなたであるよ
光を踏む 止まらずに踏むつまさきがわたしの生を深くうべなふ

浦上の祈り

田村美和子（新潟）

長崎の原爆投下の真実が初めて明かさる七十二年経て
二番目の候補地なりし長崎の中心街も雲なほ厚く

晴れ渡り原爆投下の条件に適ひし町の天主堂映ゆ

青白き一閃町を走り抜け七万人を奪ひたるとぞ

被曝せしことさへ言へず七十年漸く重たき口を開くも

悲願なる核禁止条約締結へ 被曝日本が加はらぬとは
世界初爆撃受けしゲルニカへ祈りを繋ぐ被曝マリア像
被曝地の深き祈りは網状の回路を走り世界を繋げむ

卵色のフラットシューズ

あべまさこ（富山）

健康な五センチヒールを平らにし悩みの声を身の丈に聴く
爪先をデータに向ける先生の結び目固きスポーツシューズ
来談者に寒さも猛暑も辛いです人肌ほどの部屋を借ります
本日の勤務校との共有に海馬から摘む相談の記録

寝付くまえ脳の雑木を抜けてくる抱えきれない母らの言い草
支援者のせーので背負つてゆくがごと子の障害を受容する母
相談の終結となり退室に笑顔残して紛れゆく影
卵色のフラットシューズの足取りは啞啄ののちの光にはずむ

少年 ジャパンの夏

馬渕みや子（石川）

「アイ ライク ジャパン」が君の第一声はにかみながら息はづませて

一年で十八センチ伸びし背に話題あつめてしばし賑はふ
鮨屋にて注文係を受けし君タツチバネルの英語版を押す

湖を独り占めするカモ一羽スワンボートの君と親しむ
湯あがりにシャツ一枚を着忘れて慌てる君に聖域を知る

一人読む部屋の明かりを暗くしてスタンドライトに君のくつろぐ
ヤクルトの最後の一本人の為必ず残す君の哲学

アメリカのコインを三つテーブルに並べて君は日本を去りぬ

木犀の香

伊藤かえこ（岐阜）

カタカナで書かれし鳥の鳴き声にリズムをつけて読む人のあり
図書館にふふふと笑う声のする楽しき本に会えた人かも

押し寿司の錦糸玉子のうつすらと焼きあがりゆく休日の朝
物語が立ち上がりつていく夕まぐれ少し猫背の影の近づく

木犀の香り広がる公園のやわらかい闇ふたりを包む

二十五弦琴の演奏会場にたしかに君のいる気配する
衆視の中手をつなぎいく老夫婦重ねてみたり未来の二人

何事もなかつた一日楽しくてカレーを煮込むゆつくりとろり

けふの夜景

野島 光世（静岡）

「忙しくて病気を考へるひまがない」言ひつつ涙うかべたことも

337756-10 姓よりも名よりも大事な患者番号

病衣の襟直しやるとき足の位置かへるときも言ひたりき「ありがたう」

百メートル走十四・一秒の記録もつ病む子の脚をゆつくり摩る

その妻の主治医との大事な面談に短パンで来し男をにくむ

痛いとも苦しいとも言はず逝きし子の腹に搔き傷いくすぢもあり

もう二度と「なあに」の返事もらへない三人子は眠るママを囲みて
ほんたうは東京きらひと言ひし子よけふの夜景はきれいなんだよ

パン

近藤えり子（愛知）

都心へ行く度毎立ち寄るパン屋あり都会の味にとんと魅せられ

店内の厨房に大きオーブンが五、六台ありて常時稼働す

我が好みのパン教えましよう（レーズンブール）ワンランク上の葡萄パンです

マーチガリン、ジャムなど付けばもう少し旨く食べられた食パン哀し

気が弱いピアノと
我がままなトランペット 清水 将一（愛知）

ジャズピアノホールに響くコンサート余韻を残し幕は降りたり

おしゃべりなトランペットが休みなく語り続ける元気出せよと

疲れ気味クラリネットはゆつくりと部屋を回りて席に着きたり

気の弱いピアノはいつもヴォーカルの半歩後追い微かに唄う

ブルーな日クラリネットが唄い出す仮面の下の本音見せると

我がままなトランペットはアドリブで自己主張する精一杯に

雨音に混じりて響く夜想曲今宵は少し濃い目のバーボン

心地よいジャズスティングについつられ少し濃い目のハイボール飲む

ステーショナリーラバー 外川 菊絵（愛知）

消しゴムがその身を削つてするような仕事が画面に映し出されて

銃弾を詰める兵士でない私ステープラーの芯すべらせる

「人の役に立つ職業」とう言い方にもれ落ちてはいる作業とおもう

筆ペンを握る力に従つてインクは太さを増していきます

ものさしの目盛りかすれて思春期に添う音のない深呼吸あり

順調に進む塗り絵の細部にて色えんぴつの急な寝返り

細長い箱に積もつたいっぱいのちび鉛筆の再雇用待ち

明日にはリフオーム業者が打ち碎く壁に向かって煙を吐いた

残り日

松下三千男（愛知）

コンサートの余韻奪ひて秋の風 ふと思ふ我が残り日のこと
古びたる母の遺しし書を読みて清少納言の扉を叩く

ティンパニー打ち鳴らしつつ苦惱より歓喜へ誘ふベートーヴェンは

同級会流るる川の石のごと尖りゐし子も丸くなりけり

アカシアの道を歩めば木漏れ日の光風に舞ひ蜜蜂となる

地球とふ奇跡の星の住人は愚かなるかな争ひ止めず

初霜と競ふが如く大空に皇帝ダリアたまゆら咲けり

別れの日のBGMを妻に託す「怒りの日」なきフォーレのレクイエム

動く木

桃生 苑子（愛知）

ふさがらぬ頭蓋をあはく上下させ呼吸するまだ未完成の子

ふにやふにやの子の手を取りて爪切れば月の欠片の鋭さで落つ

右腕に子を眠らせて左手で箒あやつる吾は動く木

託したる仕事はいかになりをらむ焦りとともに乳飲み子を抱く

「子育ては仕事ぢやない」と尋ねられ「そうだけど」つて返す夕暮れ

雨だれのリズムで背中たたきつつ寝付けない子をあやす真夜中

湯あがりは茹でピーナツのやはらかさガーゼタオルで包みて運ぶ

羽化せむと木となる吾にしがみつき子は息をするからだ全部で

素数にも似て

安川 道子（愛知）

矢印に逆らひのぼる階段の先に海への改札ひかる

じやん だらりん語尾につければ故郷の匂ひ濃くなりふかく吸ふ息
要るものは僅かばかりと言ひ終へて父は逝きたりひとを残して

こんなにも悲しい通夜の席にゐてほくろの白髪を抜いてやりたり
軍刀と白き軍服はひそやかに仕舞はれてをり遺骨のやうに

巡る

大村 博子（兵庫）

春荒れて鷹が低空飛びてゆく羽毛まぢかに翻へりゆく

春なれや浮かびて消ゆる追憶に空想巡る午後の時間は

路地裏の忍者になりて隠れゐき垣の隙間に夕日の差しぬ

ふはとろの卵井には葱でなく三葉が合ふと君言ふランチ

図書館の漆喰浮きたる赤煉瓦 歴史の色に染まりて深し

吾が夫に癖・こだはりのあるがゆゑ日日平穏とつつがなく過ぐ

力入れ大根下ろす吾が顔を修羅の相かと想ふ夕暮

湧き上がる想ひを歌に託さむや舟唄の旋律に乗せ

方程式の解

松浦知恵子（兵庫）

パピルスの紙に書かれし一次式核兵器までわずか二千年

三次四次方程式の解求め競いあいたる中世の人

五次の解の証明残し町はずれ決闘に消えた二十一歳

巨大なる宇宙の中の座標軸わが点進むもう戻れない

何年も数学学者達を悩ませたユーリッドの第五公準

わが祖母は英語は知らねどこの町で英独の人とともに暮らせり
顔写真並べられたるだけなのに身動きできずひめゆりの部屋

人間は作れば使つてみたくなる「猿の惑星」未来図なのか

勲章を玩具にせよと言ひたりし背中はくらき水底にあり
近くまで来てゐるのだらう潜みゐる兵士がゆらす雑木林を
ふるさとは素数にも似て葦原をゆけばゆるがぬ矢作川あり

いまだパラドックスの中 平尾三枝子（岡山）

権力といふは眩しく哀しくて皇帝ダリアのくれなる淡し
風に押されし雲の流れの速きかな強きにおもねて時は流るる

八月の白き陽浴びて永遠の『ヒロシマノート』『ナガサキノート』
白日を咲き登りゆくタチアオイ 日本はいまだパラドックスの中

闇の中にはごめく無数の言葉たち信じたときだけ光る幾ひら
幼かりし夫の泳ぎし高浜の海に迫りて巨き原発
オンカロの十万年の慟哭を地球のマグマに乗せて伝へよ
正論を語りて淋しき口の端を慰むるごと犬が舐めたり

金魚

瀬戸内光（山口）

四角なる部屋と家具あるなかにして丸めつ脱ぐストッキングを
足音に気づきたるらし草むらに潜む飛蝗が位置移すなり
頻波の寄せては作る砂の紋かたみにリズムを崩すことなく
水槽の金魚の舐むるこの水も大河流る一滴にして

疑問符をつけて投げれば疑問符をはりつけ返す守備のみの君
電線を伝わりながら夜の帳し大に降り来君待つほどに
真夏日の傷だらけなる水を恋う水面しずけき卯月のプール
静けさや夜陰に頻き啼く梟の声と傍の人の寝息と

もやもやと

新井忠代（徳島）

電線の埋設されて垂直の雨が降るなり広き舗道に
肉太の肉の字赫し闘牛の牛のやうなる肉屋の看板
古空き家いつしか屋根まで鳶の這ひみどりの館と呼ぶことにする
幼虫のぎよつとする色翅に載せ揚羽一頭うるはしく飛ぶ
葉の先にしがみつきたる空蟬の風に揺れをり夏の葬列

束の間の夢 森岡政子（徳島）

「会社つてドクロの服は駄目なんだね」組織の意味も知らない今まで
マスカラをつけた眼ぐつと見開いて私の歌を誉めたりしたね
もかちゃん♪と私の愛称呼ぶ時の語尾の音符よ戻らぬ時よ
ポップだと工業製品呼ぶ君の不遜ささもが瞬いていた

かつて敵そんな国への留学は貴女に何を与えただろう

海外の石鹼の本を持ってきて皆で選ぶ束の間の夢

青春の残り火の熾に風おくる若者文化という名の団扇
今どこに住んでいるかも分からぬ着信履歴はまだ返さない

被爆電車（六五） 岡本秀美（愛媛）

靴をぬぎ裸足となりぬ被爆死の骨が埋まると聞きたる人は
原爆死と刻まれし墓夕焼につつまれ紅き光をかへす
ヒロシマをまどへまどへと我が魂のま白き声のあふれ出づる夜
熱線をあびしピアノの奏でらる梧桐の蒸ゆるるリズムで
「ぼくは何もしとらん ぼくは何もしとらん」被爆少年の最期の言葉
禎子さんのカルテの厚み五センチの處方の空欄褪せてをりたり
被爆電車（六五一）が走り過ぐ「貸切 被爆体験講座」
サンダルの跡を残しぬ被爆死の骨埋まる土ゆらさぬやうに

五階までエレベーターに乗り合はせ互ひの息が音たて始む
「君だけを」深夜ラジオに聴きをれば在りし日のわれほろほろ溶ける
もやもやと一人見てゐた雲だつた年長けて今同じ雲だよ

要石

市川登美榮（福岡）

要石浮くな浮くなと抑え込むわが身ひとつで足らざるものをおさなごにわれは被さり夫もまたわれを庇いぬ地震搖るる中

突然に通じし電話の子の声はわれにすしりと要石なり
高台に座しいるわれの尻の下蚯蚓這うごと地震波つづく

目の前の小さき地割れ眺めつつおさな抱き伏す菜の花の中
右ひだり搖るる湯舟を錯覚かと見つめておれば「地震」の声する

神棚のお社南へ向きており紙相撲のごと地震に搖られて
ボランティアは軍手の甲のわずかなる白きところで顔の汗ふく

語りゐるのに

嶋津 裕子（福岡）

四時間を乗り継ぎ乗り継ぎなぜに行くアラスカ写真展の雪いろ

照りかへす公園おくの会場に見たり氷河のくづるる音を

熊好きの写真家熊に襲はれて熊の世界へ渡りてゆけり

亡くなりてまう二十年白熊の文と写真は語りゐるのに

粉吹雪しんと目つむる白熊にくんと目つむる飼ひ犬おもふ

へだてなく時流れたり築かれた街にもどうでもいい小石にも

病む母に見せたしひろき雪原のしろき風あと紅き夕映え

アラスカの出逢ふことなき風が見ゆ瑣事家事仕事に迫はるるタベ

診察室

田中 光子（長崎）

魚へんの弱き鰯は強くなり腱の切れたる手にもてあります
土曜日の朝の免疫抑制剤さかさに読んでもクリのリスク

中庭の陽は暖かくりウマチの治療を百年待つルノワール

尺骨の出っぱり方が同じだと整形外科医は手首を見せる
身をめぐるはげしき音のトルネードMRIの磁界に瞑る

さかごなりし次男のように出で来たりMRIの白き産道
点滴の名はレミケード高額の医療の束縛より逃げており
帰るとき未来は後ろにあるようで診察室の医師に振り向く

摩文仁野に

當間 實光（沖縄）

喜屋武岬岩をも碎けと襲い来る波濤の傾りに死者の声聴く

喜屋武岬きりぎし覆いたる榕樹の根方にひつそり髑髏ひとつ

摩文仁野に掘り出されし印ひとつ「齊藤」様の陽を浴びる証

燃え上がる烟を出で来る艦橋の男両手をあげて あれは吾が義父

艦砲の喰い残しとぞ爺様は失いし手首の今朝は疼くらし

加那叔父の洗骨終えし奥津城の琉球小スミレまなうらに見る
奪われし村はフエンスの内に消え爬竜舟の還らぬ海よ

ミサイルの直立するを日常の景としていた吾が大嶺崎